

令和2年度第1回 感染症発生動向調査部会

令和2年9月16日

月番：馬場 尚志

1 前月の感染症発生動向について（2020年第32週～第35週・8月）

<全数把握対象疾患>

- ・ 結核は高齢者を中心に毎週報告あり（累計数の対前年比は88.8%）。
- ・ 昨年20例以上報告された全数把握対象疾患のうち、本年の累計数が対前年比80%以上であるのは結核（対前年比88.8%）、アメーバ赤痢（同100%）、梅毒（同84.2%）である。
- ・ そのほかの昨年20例以上報告された感染症、腸管出血性大腸菌感染症（対前年比19.8%）、レジオネラ症（同62.5%）、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（同70.6%）、侵襲性肺炎球菌感染症（同48.9%）、百日咳（同51.7%）は、いずれも報告数が大きく減少している。
- ・ 本年10例以上報告されている感染症のうち、対前年比が増加しているものは、後天性免疫不全症候群（同162%）、侵襲性インフルエンザ菌感染症（同240%）である。ただし、侵襲性インフルエンザ菌感染症については12例中9例が1月から3月に報告されたものである。

<定点把握対象疾患>

- ・ 例年であれば流行期にあたるRSウイルス感染症が、前年同期比5.1%、前々年同期比3.7%と、報告数が顕著に減少している。ヘルパンギーナも、前年同期比0.6%、前々年同期比0.2%と、同じく顕著に減少している。
- ・ 昨年流行がみられた手足口病、伝染性紅斑、ヘルパンギーナも、それぞれ前年同期比2.2%、0.0%、0.6%と、顕著に減少している。
- ・ 咽頭結膜熱、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染性胃腸炎、水痘、流行性角結膜炎も、前年同期比で50%未満となっている。
- ・ ロタウイルスによる感染性胃腸炎は、流行期に当たる時期でもほとんど報告がなかった。
- ・ 性感染症は、上記の定点対象疾患と比較して、前年との変化の幅が小さい。

2 検討すべき課題

- ・ 現在みられている減少要因の分析・解釈
（社会全体での感染対策の効果のほか、受診もしくは検査控え、休園・休校などの影響は？）
→ 年齢による違いなどの詳細な分析、定点医療機関毎の変化の把握、腸管感染症などでは集団発生例の検討や食中毒統計との比較など？（様々な視点から要因を分析するまたとない機会か？）
- ・ 予防接種行政の指標としての解釈・意義
（特にロタウイルスワクチン、百日咳などこれからワクチンが導入もしくは導入を検討している疾患について）
- ・ 性感染症対策
（そのほかの感染症と比較して大きな変化なし）

3 情報提供すべき事項

- ・ 新型コロナウイルス感染症関連の情報について
- ・ 保健行政における組織改変（感染症発生動向調査に関する部分を中心に？）
- ・ 行政検査や保健環境研究所の役割について（解説、アピール、医療機関に対する注意点など？）
- ・ 新型コロナウイルス感染症以外の感染症動向・予防・注意点について（上記の分析結果をもとに）
- ・ 今冬のインフルエンザ対策について

4 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・ 様々な遺伝子検査の体外診断用医薬品としての認可について
- ・ 10月の定期接種実施要領の改正について

<検討結果>